

中国怪奇小説集

搜神後記（六朝）

岡本綺堂

青空文庫

第二の男は語る。

「次へ出まして、わたくしは『捜神後記』のお話をいたします。これは標題の示す通り、かの『捜神記』の後編ともいふべきもので、昔から東晋とうしんの陶淵明とうえんめい先生の撰ということになって居りますが、その作者については種々の議論がありました、『捜神記』の干宝よりも、この陶淵明は更に一層疑わしいといわれて居ります。しかしそれが偽作であるにもせよ、無いにもせよ、その内容は『捜神記』に劣らないものでありまして、『後記』と銘を打つだけの価値はあるように思われます。これも『捜神記』に伴って、早く我が国に輸入されました、わが文学上に直接間接の影響をあ

たうること多大であつたのは、次の話をお聴きくだされば、大抵お判りになるだらうかと思ひます」

貞女峽

中ちゆうしゆく 宿しゆく 県けん に 貞てい 女じよ 峽こう というのがあつて、峽の西岸の水ぎわに石があつて、その形が女のように見えるので、その石を貞女と呼び慣がわしてゐる。伝説によれば、秦の時代に数人の女がここへ法ほら螺ら貝がいを採りに来ると、風雨に逢つて昼暗く、晴れてから見ると其の一人は石に化していたというのである。

怪比丘尼

東晋とうしんの大司馬桓温かんおんは威勢赫々かくかくたるものであつたが、その晩年に一人の比丘尼びくにが遠方からたずねて来た。彼女は才あり徳ある婦人として、桓温からも大いに尊敬され、しばらく其の邸内にとどまつていた。

唯ただひとつ怪しいのは、この尼僧の入浴時間の甚だ久しいことで、いったん浴室へはいると、時の移るまで出て来ないのである。桓温は少しくそれを疑つて、ある時ひそかにその浴室を窺うと、彼は異常なる光景におびやかされた。

尼僧は赤あかはだか裸だかになつて、手には鋭利らしい刀を持っていた。

彼女はその刀をふるって、まず自分の腹を截ち割つて臟腑をつかみ出し、さらに自分の首を切り、手足を切つた。桓温は驚き怖れて逃げ帰ると、暫くして尼僧は浴室を出て来たが、その身体は常のごとくであるので、彼は又おどろかさされた。しかも彼も一個の豪傑であるので、尼僧に対して自分の見た通りを正直に打ちあけて、さてその子細を聞きただすと、尼僧はおごそかに答えた。

「もし上を凌かみごうとする者があれば、皆あんな有様になるのです」桓温は顔の色を変じた。実をいえば、彼は多年の威力を恃たのんで、ひそかに謀叛むほんを企てていたのであつた。その以来、彼は懼おそれ戒いましめて、一生無事に臣節を守つた。尼僧はやがてここを立ち去つて行くえが知れなかつた。

尼僧んげんの教えを奉じた桓温は幸いに身を全うしたが、その子の桓か玄は謀叛を企てて、彼女の予言通りに亡ぼされた。

夫の影

東晋とうしんの董寿とうじゆうが誅せられた時、それが夜中であつたので、家内の者はまだ知らなかつた。

董の妻はその夜唯ひとりで坐っていると、たちまち自分のそばに夫の立っているのを見た。彼は無言で溜め息をついているのであつた。

「あなた、今頃どうしてお退がりになつたのです」

妻は怪しんでいろいろにたずねたが、董はすべて答えなかつた。そうして、無言のままに再びそこを出て、家に飼つてあるとりかご鶏籠めぐのまわりを繞つてゆくかと思つと、籠のうちのにわとり鶏が俄かに物におどろいたように消魂けたたましく叫んだ。妻はいよいよ怪しんで、火を照らして窺つと、籠のそばにはおびただしい血が流れていた。

「さては凶事があつたに相違ない」

母も妻も一家こぞつて泣き悲しんでいると、果たして夜が明けてから主人の死が伝えられた。

蛮人の奇術

魏ぎのとき、尋陽じんよう県の北の山中に怪しい蛮人が棲んでいた。これは一種の奇術を知っていて、人を變じて虎とするのである。毛の色から爪きばや牙に至るまで、まことの虎にちつとも變らず、いかなる人をも完全なる虎に作りかえてしまふのであつた。

土地しゆうの周しゆうという家に一人の奴僕しもべがあつた。ある日、薪たきぎを伐るために、妻と妹をつれて山の中へ分け入ると、奴僕はだしぬけに二人に言つた。

「おまえ達はそこらの高い樹に登つて、おれのする事を見物していろ」

二人はその言うがままにすると、彼はかたわらの藪やぶへはいつて行つたが、やがて一匹の黄いろい斑ふのある大虎が藪のなかから跳

り出て、すさまじい唸り^{うな}声をあげてたけり狂うので、樹の上にいる女たちはおどろいて身をすくめていると、虎は再び元の藪へ帰った。これで先ずほつとしていると、やがて又、彼は人間のすがたで現われた。

「このことを決して他言するなよ」

しかしあまりの不思議におどろかさされて、女たちはそれを同輩に洩らしたので、遂に主人の耳にもきこえた。そこで、彼に好い^よ酒を飲ませて、その熟酔するのを窺つて、主人はその衣服を解き、身のまわりをも検査したが、別にこれぞという物をも発見しなかつた。更にその髪を解くと、頭^{もとどり}髻のなかから一枚の紙があらわれた。紙には一つの虎を描いて、そのまわりに何か呪^{じゆもん}文のよう

なことが記してあつたので、主人はその文句を写し取つた。そうして、酔いの醒めるのを待つて詮議すると、彼も今更つつみ切れないと覚悟して、つぶさにその事情を説明した。

彼の言うところに拠ると、先年かの蛮地の奥へ米を売りに行つたときに、三尺の布と、幾升しやうの糧りやうまい、米と、一羽の赤い雄おんどり雞と、一升の酒とを或る蛮人に贈つて、生きながら虎に變ずるの秘法を伝えられたのであつた。

雷車

東晋の永和年中えいわに、義興ぎこうの周しゅうという姓の人が都を出た。主人は

馬に乗り、従者二人が付き添つてゆくと、今夜の宿りを求むべき村里へ行き着かないうちに、日が暮れかかった。

路ばたに一軒の新しい草葺くさむききの家があつて、ひとりの女が門かどに立っていた。女は十六、七で、ここらには珍しい上品な顔かお容かたちで、着物も鮮麗である。彼女は周に声をかけた。

「もうやがて日が暮れます。次の村へ行き着くのさえ覚おぼ束つかないのに、どうして臨賀りんがまで行かれましょう」

周は臨賀という所まで行くのではなかったが、次の村へも覚束ないと聞いて、今夜はこの家うちへ泊めて貰うことにすると、女はかいがいしく立ち働いて、火をおこして、湯を沸かして、晩飯を食わせてくれた。

やがて夜の初更しよこう（午後七時―九時）とおぼしき頃に、家の外こどもから小児の呼ぶ声がきこえた。

「阿香あこう」

それは女の名であるらしく、振り返って返事をする、外ではまた言った。

「おまえに御用がある。雷車らいしやを推せという仰せだ」

「はい、はい」

外の声はそれぎりで止むと、女は周にむかつて言った。

「折角せつかくお泊まり下すつても、おかまい申すことも出来ません。

わたくしは急用が起りましたので、すぐに行つてまいります」

女は早々に出て行つた。雷車を推せとはどういう事であろうと、

周は従者らと噂をしていると、やがて夜半から大雷雨になったので、三人は顔を見あわせた。

雷雨は明け方にやむと、つづいて女は帰つて来たので、彼女がいよいよ唯ただもの者でないことを三人は覺さとつた。鄭ていちよう重ちゆうに礼をのべて、彼女にわかれて、門を出てから見かえると、女のすがたも草の家も忽ち跡なく消えうせて、そこには新しい塚があるばかりであつたので、三人は又もや顔を見あわせた。

それにつけても、彼女が「臨賀までは遠い」と言つたのはどういう意味であるか、かれらにも判らなかつた。しかも幾年の後に、その謎の解ける時節が来た。周は立身して臨賀の太守となつたのである。

武陵桃林

東晋とうしんの太元たいげん年中に武陵ぶりようの黄道真こうどうしんという漁人ぎよじんが魚を捕りに出て、溪川たにがわに沿うて漕いで行くうちに、どのくらい深入りをしたか知らないが、たちまち桃の林を見いだした。

桃の花は岸を挟んで一面に紅く咲きみだれていて、ほとんど他の雑木はなかった。黄は不思議に思つて、なおも奥ふかく進んでゆくと、桃の林の尽くるところに、川の水みなもと源がある。そこには一つの山があつて、山には小さい洞ほらがある。洞の奥からは光りが洩れる。彼は舟から上がつて、その洞穴の門をくぐつてゆくと、

初めのうちは甚だ狭く、わずかに一人を通ずるくらいであつたが、また行くこと数十歩にして俄かに眼さきは広くなつた。

そこには立派な家屋もあれば、よい田畑もあり、桑もあれば竹もある。路も縦横に開けて、とり鶏や犬の声もきこえる。そこらを往来している男も女も、衣服はみな他国人のような姿であるが、老人も小児も見るからに楽しそうな顔色であつた。かれらは黄を見て、ひどく驚いた様子で、おまえは何処どこの人でどうして来たかを集まつて訊くので、黄は正直に答えると、かれらは黄を一軒の大きい家へ案内して、鶏を調理し、酒をすすめて饗応した。それを聞き伝えて、一村の者がみな打ち寄つて来た。

かれら自身の説明によると、その祖先が秦しんの暴政を避くるがた

めに、妻子眷族けんぞくをたずさえ、村人を伴つて、この人跡絶えたところへ隠れ住むことになつたのである。その以来再び世間に出ようともせず、子々孫々ここに平和の歲月としつきを送っている。世間のことはなんにも知らない。秦のほろびた事も知らない。漢かんの興おこつたことも知らない。その漢がまた衰えて、魏ぎとなり、晋しんとなつたことも知らない。黄が一々それを説明して聞かせると、いずれもその変遷に驚いているらしかつた。

黄はそれからそれへと他の家にも案内されて、五、六日のあいだは種々の饗応を受けていたが、あまりに帰りがおくれでは家内の者が心配するであろうと思つたので、別れを告げて帰つて来た。その帰り路のところどころに目標めじるしをつけて置いて、黄は郡城に

その次第を届けて出ると、時の太守劉韻りゆういんは彼に人を添えて再び探査につかわしたが、目標はなんの役にも立たず、結局その桃林を尋ね当てることが出来なかつた。

離魂病

宋そうのとき、なにがしという男がその妻と共に眠つた。夜があけて、妻が起きて出た後に、夫もまた起きて出た。

やがて妻が戻つて来ると、夫は衾よぎのうちに眠つていたのであつた。自分の出たあとに夫の出たことを知らないので、妻は別に怪しみもせずにいると、やがて奴僕しもべが来て、旦那様が鏡をくれと仰おつ

しやりますと言つた。

「ふざけてはいけない。旦那はここに寝てゐるではないか」と、妻は笑つた。

「いえ、旦那様はあちらにおいでになります」

奴僕も不思議そうに覗いてみると、主人はたしかに衾を被^きて寝てゐるので、彼は顔色をかえて駈け出した。その報告に、夫も怪しんで来てみると、果たして寢床の上には自分と寸分違わない男が安らかに眠つてゐるのであつた。

「騒いではならない。静かにしろ」

夫は近寄つて手をさしのべ、衾の上からし^なずかにかの男を撫^なでていると、その形は次第に薄く且^かつ消えてしまつた。

夫婦も奴僕も言い知れない恐怖に囚とらわれていると、それから間もなく、その夫は一種の病いにかかつて、物の理屈も判らないようなぼんやりした人間になった。

狐の手帳

呉郡ごごの顧旃こせんが獵かりに出て、一つの高い岡にのぼると、どこかで突然に人の声がきこえた。

「ああ、ことしは駄目だ」

こんなところに誰か忍んでいるのかと怪しんで、彼は連れの者どもと共にそこらを探してあるくと、岡の上の一つの窠あながあつて、

それは古塚の頹くすれたものであるらしかつた。

その窠の中には一匹の古狐が坐つて、何かの一卷を讀んでいたので、すぐに獵犬を放してそれを咬み殺させた。それから狐の讀んでいたものを檢あめると、それには大勢の女の名を書きならべて、ある者には朱で鈎かぎを引いてあつた。察するに、妖狐が種々に形を変じて、容貌きりようのいい女子おなごを犯していたもので、朱の鈎を引いてあるのは、すでにその目的を達したものであらう。

女の名は百余人の多きにのぼつて、顧旃のむすめの名もそのうちに記しるされていたが、幸いにまだ朱を引いていなかった。

雷を罵る

呉興ごこうの章しょう苟こうという男が五月の頃に田を耕ごうしに出た。かれは真菰まこもに餅をつつんで来て、毎夕の食い物にしていたが、それがしばしば紛失するので、あるときそつと窺のぞっていると、一匹の大きい蛇が忍しのび寄よつて偷ぬすみ食くらうのであつた。彼は大いに怒こつて、長柄の鎌をもつて切り付けると、蛇は傷やついで走はつた。

彼はなおも追おつてゆくと、ある坂の下に穴があつて、蛇はそこへ逃げ込んだ。おのれどうしてくれようかと思案ししていると、穴のなかでは泣なき声こゑがきこえた。

「あいつがおれを切りやあがつた」

「あいつどうしてやろう」

「かみなりに頼んで撃ち殺させようか」

そんな相談をしているかと思うと、たちまちに空が暗くなつて、彼のあたまの上に雷らいの音が近づいて来た。しかも彼は頑強の男であるので、跳おどりあがつて大いに罵ののした。

「天がおれを貧乏な人間にこしらえたから、よんどころなしに毎日あくせくと働いているのだ。その命の綱の食い物をぬすむような奴を、切つたのがどうしたのだ。おれが悪いか、蛇が悪いか、考えてみても知れたことだ。そのくらいの理屈が分からねえで、おれに天罰をくだそうというなら、かみなりでも何でも来て見ろ。おのれ唯ただは置かねえから覚悟しろ」

彼は得物えものを取り直して、天を睨にらんで突つ立っていると、その勢

いに辟へぎえき易したのか、あるいは道理に服したのか、雷は次第に遠退いて、かえつて蛇の穴の上に落ちた。天が晴れてから見ると、そこには大小数十匹の蛇が重なり合つて死んでいた。

白帯の人

呉ごの末に、臨海の人が山に入って獵かりをしていた。彼は木間このまに粗末の小屋を作つて、そこに寝泊まりしていると、ある夜ひとりの男がたずねて来た。男は身のたけ一丈もあるらしく、黄衣をきて白い帯を垂れていた。

「折り入つてお願いがあつて参りました」と、かれは言った。

「実はわたくしに敵があつて、明日ここで戦わなければなりません。どうぞ加勢をねがいます」

「よろしい。その敵は何者です」

「それは自然にわかります。ともかくも明日の午頃ひるにその溪たにへ来てください。敵は北から来て、わたくしは南からむかいます。敵は黄の帯を締めています、わたくしは白の帯をしめています」

獵師は承知すると、かの男はよろこんで歸つた。そこで、あくる日、約束の時刻に行つてみると、果たして溪たにの北方あたしから風雨のような声がひびいて来て、草も木も皆ざわざわとなびいた。南の方あたしも同様である。やがて北からは黄いろい蛇、南からは白い蛇、いずれも長さ十余丈じゅうじょう、溪の中ほどこで行き合つて、たがいに絡み合

い咬み合つて戦つたが、白い方の勢いがやや弱いようにみえた。

約束はここだと思つて、獵師は黄いろい蛇を目がけて矢を放つと、蛇は見ごとに急所を射られて斃たおれた。

夜になると、昨夜の男が又たずねて来て、彼に厚く礼をのべた。「ここに一年とどまつて獵をなされば、きつとたくさんの獲物があります。ただし来年になったらお帰りなさい。そうして、再びここへ来てはなりません」と、男は堅く念を押して歸つた。

なるほど其の後は大いなる獲物があつて、一年のあいだに彼は莫大の金儲けをすることが出来た。それでいったんは山を降つて、無事に五、六年を送つたが、昔の獲物のことを忘れかねて、あるとき再びかの山中へ獵にゆくと、白い帯の男が又あらわれた。

「あなたは困ったものです」と、彼は愁^{うれ}うるが如くに言った。

「再びここへ来てはならないと、わたくしがあれほど戒^{いまし}めて置いたのに、それを用いないで又来るとは……。仇の子がもう成長していますから、きつとあなたに復讐するでしょう。それはあなたのみずから求めた禍いで、わたくしの知ったことではありません」

言うかと思うと、彼は消えるように立ち去ったので、獵師は俄かに怖ろしくなつて、早々にここを逃げ去ろうとすると、たちまちに黒い衣^{きぬ}をきた者三人、いずれも身のたけ八尺ぐらいで、大きい口をあいて向かつて来たので、獵師はその場に仆^{たお}れてしまった。

白亀

東晋の咸康かんこう年中に、予州よの刺史毛宝ししもうほうが、の城を守っていると、その部下の或る軍士が武昌ぶしやうの市いちへ行つて、一頭の白い亀を売っているのを見た。亀は長さ四、五寸すん、雪のように真つ白すこぶで頗る可愛らしいので、彼はそれを買つて歸つて甕かめのなかに養つて置くと、日を経るにしたがつて大きくなつて、やがて一尺ほどにもなつたので、軍士はそれを憐れんで江の中へ放してやつた。

それから幾年の後である。の城は石季龍せききりゆうの軍に囲まれて破られ、毛宝は予州を捨てて走つた。その落城の際に、城中の者の多数は江に飛び込んで死んだ。かの軍士も鎧よろいを着て、刀を持ったまま江に飛び込むと、なにか大きい石の上に墮おちたように感じ

られて、水はその腰のあたりまでしか達とどかなかつた。

やがて中流まで運び出されてよく視ると、それはさきに放してやつた白い亀で、その甲が六、七尺に生長していた。亀はむかしの恩人を載せて、むこうの岸まで送りとどけ、その無事に上陸するのを見て泳ぎ去つたが、中流まで来たときに再び振り返つてその人を見て、しずかに水の底に沈んだ。

髑髏軍

西晋せいしんの永嘉五年、張榮ちやうえいが高平こうへいの巡邏主じゆんらしゆとなつていた時に、曹嶷そうぎという賊が乱を起して、近所の地方をあらし廻るので、

張は各村の住民に命じて、一種の自警団を組織し、各所に堡壘を築いてみずから守らせた。

ある夜のことである。山の上に火が起つて、烟りや火焰が高く舞いあがり、人馬の物音や甲冑のひびきが物騒がしくきこえたので、さては賊軍が押し寄せて来たに相違ないと、いずれも俄かに用心した。張はかれらを迎え撃つために、軍士を率いて駆けむかうと、山のあたりに人影はみえず、ただ無数の火の粉が飛んで来て、人の鎧や馬のたてがみに燃えつくので、皆おどろいて逃げ戻った。

あくる朝、再び山へ登ってみると、どこにも火を焚いたらしい跡はなく、ただ百人あまりの枯れた髑髏がそこらに散乱している

のみであつた。

山

宋（南朝）の元嘉年間のはじめである。富陽の人、王という男が蟹を捕るために、河のなかへ※を作つて置いて、あくる朝それを見にゆくと、長さ二尺ほどの材木が※のなかに横たわっていた。それがために竹は破れて、蟹は一匹もかかつていなかった。

そこで、その材木を岸の上に取りつて捨て、竹の破れを修繕して帰つて来たが、翌日再び行つてみると、かの材木は又もや同じところに横たわっていて、※を破ること前日の如くである。

「これは不思議だ。この林木は何か怪しい物かも知れないぞ、いつそ焚やいてしまえ」

蟹を入れる籠のなかへかの材木を押し込んで、肩に引っかけ、帰つて来ると、その途中で籠のなかから何かさがさという音がきこえるので、王は振り返つてみると、材木はいつの間にか奇怪な物に變つていた。顔は人のごとく、体は猴さるの如くで、一本足である。その怪物は王に訴えた。

「わたしは蟹が大好きであるので、実はあなたの竹を破つて、その蟹をみんな食つてしまいました。どうぞ勘弁してください。もしわたしを赦ゆるして下されば、きつとあなたに助力して大きい蟹の捕れるようにして上げます。わたしは山の神です」

「どうして勘弁がなるものか」と、王は罵った。「貴様は一度ならず二度までも、おれの漁場をあらした奴だ。山の神でもなんでも容赦はない。罪の報いと諦めて往生しろ」

怪物はどうぞ赦してくれとしきりに搔き口説いたが、王は頑として応じないので、怪物は最後に言った。

「それでは、あなたの姓名はなんというのですか」

「おれの名をきいてどうするのだ」

「ぜひ教えてください」

「^{いや}忌だ、いやだ」

なにを言っても取り合わない。そのうちに彼の家はだんだん近くなったので、怪物は悲しげに言った。

「わたしを赦してもくれず、また自分の姓名を教えてもくれない以上は、もうどうにも仕様がなない。わたしもむなしく殺されるばかりだ」

王は自分のうちへ帰つて、すぐにその怪物を籠と共に焚いてしまつたが、^{せき}寂としてなんの声もなかつた。土地の人はこのたぐいの怪物を山^{さんそう}と呼んでいるのである。かれらは人の姓名を知ると、不思議にその人を傷つけることが出来ると伝えられている。怪物がしきりに王の姓名を聞こうとしたのも、彼を害して逃がれようとしたものらしい。

熊の母

東晋とうしんの升しょうへい平年間に、ある人が山奥へ虎を射に行くとき、あやまつて一つの穴に墮おちた。穴の底は非常に深く、内には数頭の仔熊が遊んでいた。

さては熊の穴へはいったかと思つたが、穴が深いので出ることが出来ない。そのうちに一頭の大きい熊が外から戻つて来たので、しよせん助からないと覚悟していると、熊はしまつてある果物くだものを取り出してまず仔熊にあたえた。それから又、一人分の果物を出して彼の前に置いた。彼はひどく腹が空いているので、怖ろしいのも忘れてそれを食つた。

熊は別に害を加えようとする様子もないので、彼もだんだんに

安心して来た。熊は仔熊の母であることも判った。親熊は毎日外へ出ると、かならず果物を拾つて歸つて、仔熊にもあたえ、彼にも分けてくれた。それで彼は幸いに餓死をまぬかれていたが、日数を経るうちに仔熊もおいおい生長したので、親熊は一々にそれを背負つて穴の外へ運び出した。

自分ひとりが取り残されたら、いよいよ餓死することと観念している、仔熊を残らず運び終つた後に、親熊はまた引り返して来て、人の前に坐つた。彼はその意を覺つて、その足に抱きつく、熊は彼をかかえたままで穴の外へ跳り出した。こうして、彼は無事に生き還つたのである。

烏龍

会稽かいけいの句章こうしょうの民、張ちやう然ぜんという男は都みやこの夫役ぶやくに徴めされて、年を経るまで帰ることが出来なかつた。留守は若い妻と一人の僕しもべばかりで、かれらはいつか密通した。

張は都にあるあいだに一匹いぬの狗を飼つた。それは甚だすこやかな狗であるので、張は烏龍うりゆうと名づけて愛育あいよくしているうちに、いったん帰郷することとなつたので、彼は烏龍を伴つて歸つた。

夫が突然に歸つて来たので、妻と僕は相談の末に彼を亡き者にしようとして企てた。妻は飯の支度をして、夫と共に箸をとろうとする時、俄かに形をあらためて言つた。

「これが一生のお別れです。あなたも機嫌よく箸をおとりなさい」
おかしなことを言うと思うと、部屋の入口には僕が刀を帯びて、弓に矢をつがえて立っていた。彼は主人の食事の終るのを待っているのである。さてはと覺つたが、もうどうすることも出来ない。張はただ泣くばかりであつた。烏龍はその時も主人のそばに付いていたので、張は皿のなかの肉をとつて狗にあたえた。

「わたしはここで殺されるのだ。お前は救つてくれるか」

烏龍はその肉を啖くわないで、眼を据え、くちびるを舐ねりながら、仇の僕を睨みつけているのである。張もその意を覺つて、やや安心していると、僕は待ちかねて早く食べ食べと主人に迫るので、張は奮然決心して、わが膝を叩きながら大いに叫んだ。

「烏龍、やっつけろ」

狗は声に応じて飛びかかって僕に咬みついた。それが飛鳥のよ
うな疾さ^{はや}であるので、彼は思わず得物を取り落して地に倒れた。
張はその刀を奪って、直ちに不義の僕を斬り殺した。妻は県の役
所へ引き渡されて、法のごとくに行なわれた。

鷺娘

銭塘^{せんとう}の杜^とという人が船に乗って行つた。時は雪の降りしきる
夕暮れである。白い着物をきた一人の若い女が岸の上を来かかっ
たので、杜は船中から声をかけた。

「姐ねえさん。雪のふるのにお困りだろう。こつちの船へおいでなさい」

女も立ち停まつてそれに答えた。たがいに何か冗談を言い合つた末に、杜は女をわが船へ乗せてゆくと、やがて女は一羽の白しらさ鷺ぎとなつて雪のなかを飛び去つたので、杜は俄かにぞつとした。それから間もなく、彼は病んで死んだ。

蜜蜂

宋の元嘉げんか元年に、建安けんあん郡の山賊百余人が郡内へ襲つて来て、民家の財産や女たちを掠奪した。

その挙げ句に、かれらは或る寺へも乱入して財宝を掠め取ろうとした。この寺ではかねて供養に用いる諸道具を別室に蔵めてあったので、賊はその室の戸を打ち毀して踏み込むと、忽ちに法衣を入れてある革籠のなかから幾万匹の蜜蜂が飛び出した。その幾万匹が一度に群がって賊を螫したので、かれらも狼狽した。ある者は体じゆうを螫され、ある者は眼を突きつぶされ、初めに掠奪した獲物をもみな打ち捨てて、転げまわって逃げ去った。

犬妖

りんりよざん
林慮山の下に一つの亭がある。ここを通つて、そこに宿る者

はみな病死するということになっている。あるとき十余人の男おんなが入りまじって博奕ばくちをしているのを見た者があつて、かれらは白や黄の着物をきていたと伝えられた。

しつはくい

伯夷しつはくいという男がそこに宿つて、燭しよくを照らして経きようを讀んでい

ると、夜なかに十余人があつまつて来て、彼と列ならんで坐を占めたが、やがて博奕の勝負をはじめたので、はひそかに燭をさし付けて窺うと、かれらの顔はみな犬であつた。そこで、燭を執つて起たちあがる時、かれは粗相そそうの振りをして、燭の火をかれらの着物にこすり付けると、着物の焦げるのがあたかも毛を燃やしたように匂つたので、もう疑うまでもないと思つた。

かれは懐ろ刀をぬき出して、やにわにその一人を突き刺すと、

初めは人のような叫びを揚げたが、やがて倒れて犬の姿になった。それを見て、他の者どもはみな逃げ去った。

干宝の父

東晋の干宝かんぼうは字をあざな令升れいしやうといい、その祖先は新蔡しんさいの人である。かれの父の瑩けいという人に一人の愛妾があつたが、母は非常に嫉妬ぶかい婦人で、父が死んで埋葬する時に、ひそかにその妾をも墓のなかへ押し落して、生きながらに埋めてしまった。当時、干宝もその兄もみな幼年であつたので、そんな秘密をいつさい知らなかつたのである。

それから十年の後に、母も死んだ。その死体を合葬するために父の墓をひらくと、かの妾が父の棺の上に俯伏しているのを発見した。衣服も生きていた時の姿と変わらず、身内もすこしく温かで、息も微かにかよっているらしい。驚き怪しんで輿こしにかき乗せ、自宅へ連れ戻つて介抱すると、五、六日の後にまったく蘇生した。

妾の話によると、その十年のあいだ、死んだ父が常に飲み食いの物を運んでくれた。そうして、生きていた時と同じように、彼女と一緒に寝起きをしていたのみか、自宅に吉凶のことある毎ごとに、一々彼女に話して聞かせたというのである。あまりに不思議なことであるので、干宝兄弟は試みに彼女に問いただしてみると、果たして彼女は父が死後の出来事をみなよく知っていて、その言う

ところがすべて事実と符合するのであった。彼女はその後幾年を無事に送って、今度はほんとうに死んだ。

干宝は『搜神記』の著者である。彼が天地のあいだに幽怪神秘のことあるを信じて、その述作に志すようになったのは、少年時代におけるこの実験に因つたのであると伝えられている。

大蛟

安城あんじょう平都へいと県の尹氏いんしの宅は郡の東十里の日黄村じつこうにあつて、そこに小作人こさくじんも住んでいた。

元嘉げんか二十三年六月のことである。ことし十三になる尹氏の子供

が、小作の小屋の番をしていると、一人の男が来た。男は年ごろはたち二十ぐらいで、白い馬に騎のつて繖かさをささせていた。ほかに従者四人、みな黄衣を着て東の方から来たが、ここの門前に立つて尹氏の子供を呼び出し、暫く休息させてくれと言った。承知して通すと、男は庭へはいつて床しょうぎ几こに腰をおろした。従者の一人が繖をさしかけていた。見ると、この人たちの着物には縫い目がなく、鱗うろこのような五色の斑ふがあつて、毛がなかつた。やがて雨を催して来ると、男は馬に騎のつた。

「あしたまた来ます」と、彼は子供を見かえつて言った。その去るところを見ると、この一行は西へむかい、空を踏んで次第に高く昇つて行つた。暫くすると、雲が四方から集まつて白昼も闇の

ようになった。

その翌日、俄かに大水が出て、山も丘も谷もみなひたされ、尹の小作小屋もまさに漂い去ろうとした。このとき長さ三丈とも見える大きい蚊みずちがあらわれて、身をめぐらして此の家を護った。

白水素女

晋の安帝あんていのとき、候官こうかんの謝端しゃたんは幼い頃に父母をうしな
い、別に親類もないので、となりの人に養育されて成長した。

謝端はやがて十七、八歳になったが、努つとめて恭謹の徳を守つて、決して非法の事をしなかつた。初めて家を持つた時には、いまだ

定まる妻がないので、となりの人も気の毒に思つて、然るべき妻を探してやろうと心がけていたが、相当の者も見付からなかつた。彼は早く起き、遅く寝て、耕作に怠りなく働いていると、あるとき村内で大きいほらがい法螺貝を見つけた。三升入りの壺ほどの大きい物である。めずらしいと思つて持ち帰つて、それを甕かめのなかに入れて置いた。その後、彼はいつもの如くに早く出て、夕過ぎに帰つてみると、留守のあいだに飯や湯の支度がすっかり出来ているのである。おそらく隣りの人の親切であろうと、数日の後に礼を言いにいくと、となりの人は答えた。

「わたしは何もしてあげた覚えはない。おまえはなんで礼をいうのだ」

謝端にも判らわかなくなつた。しかも一度や二度のことではないので、彼はさらに聞きただすと、隣りの人はまた笑つた。

「おまえはもう女房をもらつて、家のなかに隠してあるではないか。自分の女房に煮焚にたきをさせて置きながら、わたしにかれこれ言うことがあるものか」

彼は黙つて考えたが、何分にも理屈が呑み込めなかつた。次の日は早朝から家を出て、また引つ返して籬かきの外から窺つていると、一人の少女が甕の中から出て、竈かまどの下に火を焚きはじめた。彼は直ぐに家へはいつて甕のなかをあらためると、かの法螺貝は見えずなくて、竈の下の女を見るばかりであつた。

「おまえさんはどこから来て、焚き物をしていなさるのだ」と、

彼は訊いた。

女は大いに慌てたが、今さら甕のなかへ帰ろうにも帰られないので、正直に答えた。

「わたしは天^{てん}漢^{かん}の白^{はく}水^{すい}素^そ女^{じょ}です。天帝はあなたが早く孤^み児^なになつて、しかも恭謹の徳を守っているのをあわれんで、仮りにわたしに命じて、家を守り、煮焚きのわざを勤めさせていたので、十年のうちにはあなたを富ませ、相当の妻を得るようになつて、わたしは帰るつもりであつたのですが、あなたはひそかに窺つてわたしの形を見付けてしまいました。もうこうなつては此^こ処^こにとどまることは出来ません。あなたはこの後も耕^すし、漁^りの業^{わざ}をして、世を渡るようになさるがよろしい。この法螺貝を残して行き

ますから、これに米穀べいこくをたくわえて置けば、いつでもとほ乏しくなるような事はありません」

それと知って、彼はしきりにとどまることを願ったが、女は肯きかなかつた。俄かに風雨が起つて、彼女は姿をかくした。その後、彼は神座をしつらえて、祭祀さいしを怠らなかつたが、その生活はすこぶる豊かで、ただ大いに富むというほどでないだけであつた。土地の人の世話で妻を迎え、後に仕えて令長となつた。

今の素女祠そじよしがその遺跡である。

千年の鶴

丁令威ていれいゐは遼東りょうとうの人で、仙術を靈虚山れいきよざんに学んだが、後に鶴けに化して遼東へ帰つて来て、城門の柱に止まった。ある若者が弓をひいて射ようとする、鶴は飛びあがつて空中を舞いながら言つた。

「鳥あり、鳥あり、丁令威。家を去る千年、今始めて帰る。城廓もとの如くにして、人民非なり。なんぞ仙を学ばざるか、塚る纍る々るたり」

遂に大空高く飛び去つた。今でも遼東の若者らは、自分たちの先代に仙人となつた者があると言ひ伝えているが、それが丁令威という人であることを知らない。

箏笛浦

廬江ろこうの箏笛浦そうてきほには大きい船がくつがえつて水底に沈んでいる。これは魏王ぎ曹操そうそうの船であると伝えられている。

ある時、漁師が夜中に船を繋いでいると、そのあたりに笛や歌の声こゝろがきこえて、香こうの匂においが漂よっていた。漁師が眠りに就くと、なにびとが来て注意した。

「官船に近づいてはならぬぞ」

おどろいて眼をさまして、漁師はわが船を他の場所へ移した。沈んでいる船は幾人の歌妓うたひめを載せて来て、ここの浦で顛覆てんぷくしたのであるという。

凶宅

宋の襄城じょうじょうの李頤りい、字は景真あざな、後に湘東しょうとうの太守になつた人であるが、その父は妖邪を信じない性質であつた。近所に一軒の凶宅があつて、住む者はかならず死ぬと言ひ伝えられているのを、父は買い取つて住んでいたが、多年無事で子孫繁昌した。そのうちに、父は県知事に昇つて移転することになつたので、内外の親戚らを招いて留別りゅうべつの宴を開いた。その宴席で父は言つた。

「およそ天下に吉だとか凶だとかいふ事があるだろうか。この家

もむかしから凶宅だといわれていたが、わたしが多年住んでいるうちに何事もなく、家はますます繁昌して今度も栄転することになった。鬼などというものが一体どこにいるのだ。この家も凶宅どころか、今後は吉宅となるだろう。誰でも勝手にお住みなさい」

そう言い終つて、彼は起つてた厠へかわやゆくと、その壁にむしろ蓆を巻いたような物が見えた。高さ五尺ばかりで、白い。彼は引つ返して刀を取つて来て、その白い物を真つ二つに切ると、それが分かれて二つの人になった。さらに横なぐりに切り払うと、今度は四人になった。その四人が父の刀を奪い取つて、その場で彼を斬り殺したばかりか、座敷へ乱入してその子弟を片端から斬り殺した。

李姓の者はみな殺されて、他姓の者は無事にまぬかれた。

そのとき李頤だけはまだ幼少で、その席に居合わせなかつたので、変事の起つたのを知ると共に、乳母が抱えて裏門から逃げ出して、他家に隠れて幸いに命を全うした。

蛟を生む

長沙^{ちようさ}の人とばかりで、その姓名を忘れたが、家は江辺に住んでいた。その娘が岸へ出て衣を濯^{きものすす}いでいると、なんだか身内に異状があるように感じたが、後には馴れて気にもかけなかつた。

娘はいつか懐妊して、三つの生き物を生み落したが、それは小鱒^{いわし}のような物であつた。それでも自分の生んだ物であるので、

娘は憐れみいつくしんで、かれらを行ぎようずい水のたらいの盥らいのなかに養やしやうつて置くと、三月ほどの後にだんだん大きくなつて、それが蚊みずちの子であることが判つた。蚊は龍りゆうのたぐいである。かれらにはそれぞれあぎなの字をあたえて、大を当とう洪こうといい、次を破は阻そといい、次を撲ぼく岸んと呼んだ。

そのうちに暴雨出水と共に、三つの蚊はみな行くえを晦くわいましたくわいが、その後も雨が降りそうな日には、かれらが何処からか姿を見せた。娘も子供らの来そうなことを知つて、岸边へ出て眺めてみると、蚊もまた頭かしらをあげて母をながめて去つた。

年を経て、その娘は死んだ。三つの蚊は又あらわれて母の墓所に赴き、幾日も号ごう哭こくして去つた。その哭なく声は狗いぬのようであつ

た。

秘術

錢塘せんとうの杜子恭としきようは秘術を知っていた。かつて或る人から瓜を割さく刀を借りたので、その持ち主が返してくれと催促すると、彼は答えた。

「すぐにお返し申します」

やがて其の人が嘉興かこうまで行くと、一尾の魚が船中に飛び込んだ。その腹を割くと、かの刀があらわれた。

木像の弓矢

孫恩そんおんが乱を起したときに、呉興ごこうの地方は大いに乱れた。なんのためか、ひとりの男が蔣侯しょうこうの廟びょうに突入した。蔣子文しょうしぶんは広陵うりょうの人で、三国の呉ごの始めから、神としてここに祀られていたのである。

蔣侯の木像は弓矢をたずさえていたが、その弓を絞つて飄ひょうと射ると、男は矢にあたって死んだ。往来の者も、廟を守る者も、皆それを目撃したという。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：もりみつじゅんじ

2003年7月31日作成

2003年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

中国怪奇小説集

搜神後記（六朝）

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 岡本綺堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>